

pxrubrica パッケージサンプル

某 ZR

コンパイル日付：2017年4月25日

1 サンプル

1.1 基本的な用法

- モノルビ (m オプション)：各漢字に一つのルビブロック
例： `\ruby[m]{鷹}{たか}` → 鷹 `\ruby[m]{鶯}{うぐいす}` → 鶯
- グループルビ (m オプション)：漢字列全体に一つのルビブロック
例： `\ruby[g]{雲雀}{ひばり}` → 雲雀 `\ruby[g]{不如帰}{ほととぎす}` → 不如帰
- 熟語ルビ (j オプション)：各漢字にルビを対応させるが熟語として読む
例： `\ruby[j]{孔雀}{くじやく}` → 孔雀 `\ruby[j]{七面鳥}{しちめんちよう}` → 七面鳥
- ルビ文字列中の | は各漢字の読みの境界を示す。(孔=く、雀=じゃく)。グループルビでは不要である。
- 組版結果の比較：

モノルビ	<code>(\ruby[m]{小鳩}{こ ぼと})</code>	→	小鳩	鶺鴒	雷鳥	燕
グループルビ	<code>(\ruby[g]{小鳩}{こぼと})</code>	→	小鳩	鶺鴒	雷鳥	燕
熟語ルビ	<code>(\ruby[j]{小鳩}{こ ぼと})</code>	→	小鳩	鶺鴒	雷鳥	燕

熟語の各漢字とルビが対応する場合は、熟語ルビ (j) を使い、そうでない (熟字訓の) 場合はグループルビ (g) を使うのが通例である。特に熟語の各漢字ごとの読みを明示したい場合はモノルビ (m) を使うとよい。なお、漢字一文字に対するルビの場合は、m、g、j の何れも同じ結果になる。
- オプションの既定値を `\rubyssetup` 命令で設定できる。例えば、`\rubyssetup{g}\ruby{軍鶏}{しゃも}` は `\ruby[g]{軍鶏}{しゃも}` と等価になる。“既定値の既定値”は `|cjPeF|` である。

1.2 進入・突出

- ルビの進入の制御：

進入無し	<code>この\ruby[-]{鶺鴒}{かささぎ}の</code>	→	この鶺鴒の	この鶺鴒の	この鶺鴒の
進入量小	<code>この\ruby[(-)]{鶺鴒}{かささぎ}の</code>	→	この鶺鴒の	この鶺鴒の	この鶺鴒の
進入量大	<code>この\ruby[<->]{鶺鴒}{かささぎ}の</code>	→	この鶺鴒の	この鶺鴒の	この鶺鴒の
- もし「ルビは仮名にはかけてよいが漢字はダメ」という場合は、“この`\ruby[<-|]{鶺鴒}{かささぎ}`”と書くと「この鶺鴒等」の出力が得られる。
- 基本モード (m / g / j) と進入を同時に指定したい場合は、オプション文字列を `|g|` や `|m>` のよう

にする。ここで、“-”は「基本モードは既定値を用いる」ことを意味する。

- 突出の制御：オプション `||` で突出が抑止される。

<small>すずめ</small> 雀の… ← <code>\ruby[->]{雀}{すずめ}</code> インコの	vs.	<small>すずめ</small> 雀の… ← <code>\ruby[->]{雀}{すずめ}</code> インコの
-------------------------------------------------------------------------	-----	------------------------------------------------------------------------

1.3 発展的な用法

- `\aruby`：欧文に対してルビを付ける：
例： `\aruby{Get out}{ゲラウツ}!` → `Get out!`
- `\rubyfontsetup`：ルビ出力のためのフォントを指定する。例えば、ゴシック体の漢字列に対して明朝体のルビを振りたい場合は、次のようにする：
`\rubyfontsetup{\mcfamily}この{\gtfamily \ruby[j]{明朝体}{みん|ちよう|たい}}` → この明朝体